

## Word in Haida : Mismatch between its phonological and morphological features

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027269">https://doi.org/10.14945/00027269</a>

# ハイダ語における「語」：音韻面と形態面から<sup>1</sup>

堀 博文

キーワード：語 形態論 音韻的な語 ハイダ語

## 1. はじめに

本稿は、ハイダ語における語構成のあり方、すなわち、接辞などの語を構成する要素がどのように連なって語という単位を作り上げているのか、また、一方で、それが、音声的な声の高さであるピッチとそれを担う音節の現われに認められる音韻的な単位とどの程度一致するのかを考察することを目的とする。前者は、Dixon (2002) がいうところの「文法的な語 grammatical word」、後者は、「音韻的な語 phonological word」に当たるといえる。本稿でも、便宜上、その区分に従う（但し、前者は「形態的な語」あるいは「形態面における語」と言い換え、後者も「音韻面における語」などと称することがある<sup>2</sup>）。

ハイダ語の類型論的な特徴を略述すると、形態論的にみれば、形態素間の境界が比較的明瞭な膠着的な言語であり、とりわけ動詞は、多くの形態素が含まれることがあり、いわゆる複統合的な特徴をみせることがある。

統語的な面でいうと、他動詞文における語の基本的な配列順序はSOVである（但し、主語や目的語となる名詞句が代名詞の場合はOSVもあり得る）。更に、主要な項となる名詞句には格関係を示す標識が付かない無標示型である（但し、

---

<sup>1</sup> ハイダ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸のハイダ・グワイ Haida Gwaii (旧名：クイーン・シャーロット諸島) とアメリカ合衆国アラスカ州南東部で話される系統不明の言語である。方言は大きく分けて、北方方言と南方方言があり、前者はハイダ・グワイのマセット Masset、アラスカ州のケチカン Ketchikan やハイダバーグ Hydaburg、後者はハイダ・グワイのスキドゲイト Skidegate で話される。本稿のデータは、南部のスキドゲイト方言のものである。

<sup>2</sup> この「音韻的な語」というのが正しい捉え方なのかどうかは疑問がある。すなわち、音韻面での最小の単位である音素が組み合わされて音節、更に音脚、イントネーション句という表現上（形式上）の単位が作り出されるわけであるから、「語」とはレベルが違うと考えるべきであろう（宮岡 2015: 111-2 も参照）。

目的語となる名詞項にはその標識（接語）が付くことがある）。人称代名詞のうち、1人称単数と複数、また、2人称単数には動作者格と目的格の区別があり、いわゆる活格型のアライメントを示す。

## 2. 音韻面からみたハイダ語の「語」

Dixon (2002: 13) によれば、「音韻的な語」は、分節音の面では、音素配列や音節構造、また、ポーズの現われなど、韻律的な面では、ストレス（強勢）や声調の現われ、また、分節音にまたがって現われる鼻音化、母音調和など、更に、音韻規則の適用範囲といった点から捉えられる。

これらの諸特徴のうち、ハイダ語では、声の高さによるピッチの現われが音韻的な語を捉える一つの指標と見做し、とりわけ[ $\dot{V}$ :]（低ピッチを担う長母音の音節。後述参照）の現われが形態面における語とどのような関係にあるのかを考えてみることにする。

ハイダ語には、音声的に高(H) [ $\dot{V}$ ]・中(M) [unmarked]・低(L) [ $\dot{V}$ ]の三段階のピッチがあり、各音節がそれらのピッチのいずれかを担う。更に、それらのピッチのいずれが現われるかは、音節をなすライム rhyme（すなわち、音節全体から音節頭子音を除いた部分。(1)を参照)がどのようなタイプであるかによって、また、その音節がどの位置に現われるかによって、大体予測することができる（詳しくは、Hori 1996, 堀 2001を参照）。

### (1) ハイダ語の音節構造

音 節		
初頭子音 onset	ライム rhyme	
(C) C (G)	核 nucleus	末尾子音 coda
	$V_i (V_i)$	(G) (C)

(C: 子音, G: /w, y/)

ハイダ語の音節のライムをピッチの現われによって整理すると、次の4つの型に分けられる（[ ]に各々の音声的な実現を示す）。

### (2) ハイダ語のライムとピッチの関係（音素レベル→音声レベル）

a. /VV(C)/ → [ $\dot{V}$ :(C)]

b. /VR(C)/ → [ $\dot{V}$ R(C)] (R:/m, n, ŋ; w, y, l/)

- c. /V/ → [V̇:] ~ [V̇] ~ [V]  
 d. /VO/ → [V̇O] ~ [VO] (Oは子音からRを除いたもの<sup>3</sup>)

単音節語(名詞に限られる。3.1を参照)におけるピッチの現われは、次のようである(a~dは(2)のそれに対応する)<sup>4</sup>。

(3) 単音節語におけるピッチの現われ

- a. /suu/ [sú:] ‘lake’, /ʔaa/ [ʔá:] ‘T’, /dii/ [dí:] ‘me’, /q’aas/ [q’á:s] ‘spruce pitch’, /sgaal/ [sgá:l] ‘bee’  
 b. /gil/ [gíl] ‘bay’, /qan/ [qán] ‘chest’, /sdiŋ/ [sdíŋ] ‘two’, /k’ay/ [k’áy] ‘apple’  
 c. /qu/ [qù:] ‘sea otter’, /ʔga/ [ʔgà:] ‘rock’, /na/ [nà:] ‘house’  
 d. /mad/ [màt] ‘mountain goat’, /dah/ [dàh] ‘lowbush cranberry’, /gud/ [gùt] ‘each other’

(3a)と(3b)をみると、高ピッチのみが現われ、また、(3c)と(3d)をみると、/V/タイプと/VO/タイプのライムは低ピッチしか担わない。つまり、音声的に三段階あるピッチのうち、単音節語において現われるのは、高ピッチか低ピッチしかない。また、/V/タイプのライム(但し、/ə/を除く)は長母音となって実現し(すなわち[V̇:]), 短母音の[V̇]が現われることはない<sup>5</sup>。

次に(2)に示したライムが二音節語に現われた時にどのピッチを担うかを(4)によってみる(a~dは(2)のそれに対応する。また、ピリオドは音節の境界を示す。以下同様)。

(4) 二音節語におけるピッチの現われ

- a. /VV(C)/ [V̇:(C)]: /dii.dən/ [dí:.dón] ‘fly’, /taa.tl’aad/ [tá:.tl’á:t] ‘trout’

<sup>3</sup> 但し、閉鎖音と破擦音の中で無声有気音と放出音の一部は音節末には現われない。また、/ʔ/も現われない。

<sup>4</sup> ハイタ語の音素目録は次の通りである。本稿では、音素表記・音声表記いずれにおいても、基本的にアメリカ式の音声記号の慣用に従う(下の[ ]に示したのは国際音声字母による表記である)。また、閉鎖音と破擦音の有声字は無声無気音、無声字は無声有気音を表わす。

子音音素: b, d, g, ʔ, p, t, k, q, t’, k’, q’: j [t̪], c [tʰ], c’ [t̪’]: dl [t̪], tl [tʰ], tl’ [t̪’]: s, ʃ, x, ʒ, h:w, y [j], l, ʔ [ʔ]; m, n, ŋ; ’

母音音素: i, ii [i:], a, aa, u, uu, ee, ə

以下、本稿で示す音声表記は簡略的なものである。

<sup>5</sup> [V̇:]を/V/と見做す音韻論的解釈はHori (1996)を参照。但し、長母音として実現しない例外がいくつかあるが(例:/gina/ [ginà] ‘something’), それらは語彙的に限られている。

- b. /VR(C)/ [V̇R(C)]: /gay.na/ [gáy.na] ‘driftwood’, /qu.gin/ [qù:.gín] ‘paper’  
 c. /V/ [V̇:] ~ [V̇] ~ [V]: /q’u.ji/ [q’ù:.d̂zi] ‘bark’, /ʔtal.ga/ [ʔtál.ga] ‘nest’  
 d. /VO/ [V̇O] ~ [VO]: /sk’id.gaən/ [sk’it.gá:n] ‘salalberry’, /gyaa.ʔad/ [gyá:.ʔat] ‘blanket’

(4)をみると、二音節語におけるピッチの型は、[HH], [HM], [LH], [LL]のみであり、第一音節に中ピッチが現われる[MH] [MM] [ML]のような型はない。加えて、中ピッチが第二音節に現われるのは第一音節が高ピッチの場合のみ、また、低ピッチが第二音節に現われるのは第一音節が低ピッチの場合のみであり、[LM]や[HL]のような型もない。更に、[V̇:]が現われるのは第一音節のみであり、第二音節に現われることはない。

単音節語と二音節語におけるライムの型とピッチの現われの関係をまとめると、次のようになる。

(5) ライムとピッチの関係

ライムのタイプ	音声的実現	位置の制約
a. /VV(C)/	[V̇:(C)]	} なし
b. /VR(C)/	[V̇R(C)]	
c. /V/	{ [V̇:]	語頭など（後述）
	{ [V̇]	前の音節がL
	{ [V]	前の音節がHかM
d. /VO/	{ [V̇O]	語頭か前の音節がL
	{ [VO]	前の音節がHかM

(5)にまとめたことは、(6)に示す三音節以上の語においても同様に当て嵌まる。

(6) 三音節以上の語におけるピッチの現われ

- a. /VV(C)/ [V̇:(C)]: /taa.kid.gaa.ʔu/ [tá:.kit.gá:.ʔu] ‘fork’,  
 /ci.t’iis.gu/ [t̂i:..t’i:s.gu] ‘coat’, /ʔya.na.huu/ [ʔyà:.nà.hú:] ‘turnip’,  
 b. /VR(C)/ [V̇R(C)]: /sk’añ.ʔus.laən/ [sk’añ.ʔus.lá:ŋ] ‘nits’,  
 /st’a.ʔk’un.k’i/ [st’á:.ʔk’ún.k’i] ‘slippers’, /tlə.da.gaaw/ [t̂l̂.dà.gá:w] ‘mountain’  
 c. /V/ [V̇:] ~ [V̇] ~ [V]: /sk’a.xi.ʔaaw/ [sk’á:.çi.ʔá:w] ‘robin’,  
 /q’a.ʔa.da/ [qà:.ʔà.dà] ‘dogfish’, /tay.jan.da/ [táy.d̂zán.da] ‘(a type of) herring roe’

d. /VO/ [V̇O] ~ [VO]: /ʔaʔ.ʔaa.na/ [ʔaʔ.ʔá:.na] ‘so and so’,  
 /taa.gas.ga/ [tá:.gas.ga] ‘eat’ (future), /na.gas.ga/ [ná:.gàs.gà] ‘live’ (future)

(6)をみると、(5)に示したように、高ピッチを担う音節 (aとb)は、どの位置にも現われ得る。一方、中ピッチ (cとd)は前の音節が高ピッチもしくは中ピッチでなくてはならず、また、低ピッチ (cとd)は第一音節に現われることがあるものの、第二音節以降に現われる場合は、その前の音節が低ピッチでなくてはならない。言い換えれば、(c)と(d)のタイプのライムが中ピッチと低ピッチのいずれを担うかは、その音節が現われる位置によって決まっており、その現われに制約があるといえる。

ここで注目したいのは、これまでの例をみる限り、(c)タイプのライム /V/ が低ピッチを担い、かつ、長母音となって実現する (つまり [V̇:] ) のは、第一音節に現われる場合に限られているという点である。すなわち、この [V̇:] の限定的な現われは、音韻的な単位 (音韻的な語) の始まりを示すものであり、特に単音節語にもみられることから、音韻的な自立度が高いと見做すことができる<sup>6</sup>。一方、同じ /V/ タイプのライムが [V] あるいは [V̇] として実現するのは、あくまでも前の音節のピッチに依存しているので、自立性はない。同様に、(d)タイプのライム /VO/ も単音節語や二音節以上の語の第一音節に現われ得るものの、第二音節以降に現われる場合は、やはり前の音節のピッチに依存するため、自立性という点でみれば、[V̇:] よりも低く、音韻的な語の区切りを示すとみるには不十分である。Hori (1996) では、/V/ タイプのライムが続く限り、先行音節によって指定されたピッチが spread するという解釈をとっている。その spreading が適用されるのがどの範囲までかが問題となる (5節参照)。

次節以降では、ハイダ語の形態的な語がどのように認められるかについて考察するが、とりわけ、/V/ タイプのライムの音声の実現の一つである [V̇:] が形態的な語のどの位置に現われるかも併せて観察することにする。

### 3. 形態論的にみたハイダ語の「語」

ハイダ語において、語は、語根を核としてそれに接辞が付加されて形成され

<sup>6</sup> 単音節語に現われるという点でいえば、高ピッチを担う (a) /VV(C)/ や (b) /VR(C)/ も同様に音韻的な自立度が高いと考えられるが、それらのライムの型をもつ音節は、如何なる位置にも現われ得るという点で、音韻的な単位の区切りを示すとは考えられない。

る。名詞は、語根だけでそのまま語（つまり単純語）として働きうるが、動詞は、語根だけで語としては機能できず、必ず屈折接尾辞を伴わなくてはならない。また、名詞も動詞も語根（あるいは語根と接辞からなる語幹）同士が繋がった複合語を作ることができる。

本節では、名詞の形態法（3.1）と動詞の形態法（3.2）の概略を述べる。

### 3.1 名詞

ハイダ語の名詞は、その指示対象が譲渡可能所有を表わすか譲渡不可能所有を表わすかによって形態法に違いがあるが、ここでは、譲渡可能所有の場合を中心に取り上げる。

名詞は、語根だけからなる単純語、語根（語幹）同士が繋がった複合語があり、譲渡可能所有の対象を表わす名詞には、必要に応じて限定接尾辞が付加されることがある。ハイダ語では、派生接尾辞が付加されることによって名詞語幹を派生することがあまりみられない。一方、動詞への名詞派生接尾辞の付加、あるいは、母音変換によって出勤名詞 *deverbal noun* を作ることがある。更に、動詞と名詞が同じ形式のいわゆるゼロ派生もある。

(7)にあげるのは、名詞語根だけからなる単純語の例である。aは単音節、bは複音節からなる。

#### (7) 単純語

- a. dah ‘lowbush cranberry’, **χ**a ‘dog’, **ɬ**ga ‘rock’, gul ‘tobacco’, guud ‘eagle’, k’iw ‘road’
- b. gəwjaaw ‘drum’, gaayu ‘ocean’, **g**uda ‘box’, gwaayk’yaa ‘hellebore’, guudiijaay ‘sea urchin’

太字で示したのは、上で述べた [V:] として実現する /V/ タイプのライムの音節である（例えば、/χa/ [χà:] ‘dog’, /guda/ [gù:dà] ‘box’ など。以下同様に示す）。これらの例においては、そのような音節は、すべて語頭にしか現われておらず、それゆえに、形態的な語と音韻的な語が一致しているといえる。

(7)に示した例は、それだけで語として機能しうる。すなわち、格関係を標示する要素は、語の中で示されるわけではなく、多くの場合、他動詞節における主語と目的語といった文法的機能は、配列順序によって示される（但し、動詞によっては、その目的語であることが名詞に付く後置詞によって示されることがある）。

先に触れたように、譲渡可能所有を表わす名詞には限定接尾辞 definite suffix *-gaay* が付き、その名詞が談話の中ですでに言及された対象や特定の対象であることを示す（限定接尾辞が付いた形式を限定形という）。この限定接尾辞は、前の音環境によっていくつかの異形態があり、また、その接尾辞自体だけでなく、一部の名詞に変容を加えるなどの形態音韻規則が適用される。(8)にいくつかの例を示す。

(8) 名詞の限定形

*dahgaay* ‘the lowbush cranberry’, *χaagaay* ‘the dog’, *gulaay* ‘the tobacco’,  
*cuudaay* ‘the eagle’

例えば, *gul* ‘tobacco’ は, /VR/ タイプのライムなので, 単独で現われる時は, 高ピッチを担うが, 限定接尾辞が付くと, 限定接尾辞の初頭子音が脱落したことによって (すなわち, |gul-gaay| > /gu.laay/) 音節が再編され, /gu.laay/ [gù:lá:y] のように第一音節の /gu/ が長母音として実現し, 低ピッチを担うようになる。

次に複合語をみると, ハイダ語においては, 複合語は, 語根 (あるいは語幹) がゆるく接合したものが一般的である。次にあげるのは, 名詞語根同士が結びついた複合名詞の例である<sup>7</sup>。

(9) 複合名詞 (N+N)

- a. *ħk’yaan+q’ust’an* (forest+crab) ‘frog’, *sq’aw+gaan* (salmonberry.bush+berry) ‘salmonberry’, *jigu+ɬgaay* (gun+the.rock) ‘bullet’, *q’ada+tləgaay* (area.toward.the.sea+the.ground) ‘mainland’
- b. *tləga+sq’aw+gaan-ga* (ground+salmonberry.bush+berry+ATTR?) ‘blackberry’, *χaŋas+gaan-ʔu* (shadow+ROOT-INST) ‘mirror’

(9)はいずれも名詞語根同士からなる複合語である。(9a)の‘frog’と‘salmonberry’の前項と後項はいずれも語として現われるが, ‘bullet’の後項は複合語にしか現われない<sup>8</sup>。‘mainland’の後項 *tləgaay* は, *tləga* ‘ground’ ((9b)の‘blackberry’

<sup>7</sup> 以下の例で用いる略号と記号は次の通りである。ATTR: attributive, CL: classifier, DUR: durative, FOC: focus, INDF: indefinite, INFO: information, INST: instrument, PL: plural, POSS: possessive, REFL: reflexive, SG: singular; - : 接辞, = : 接語, + : 複合

<sup>8</sup> 自立的に使われる *ɬga* ‘rock’ の限定形は *ɬgaagaay* である。



を参照)に限定接尾辞 *-gaay* が付加された限定形である。一方, (9b) は名詞語根同士からなる複合語に更に接尾辞 (*-ga* attributive [ATTR], *-ʔu* instrument [INST]) が付いたものとみられるが, それらの接尾辞がない *tləɡaa+sq'aw+gaan* や *χaŋas+gaan* は語として存在しない。‘mirror’ の *χaŋas* と語根 *gaan* は, 単独で現われ得ない拘束形式である。

これらが複合語として形態的に一つの語であることは, 上にあげた限定接尾辞が末尾に付加されることから示される (例: *ʔk'yaanq'ust'anaay* ‘the frog’)。

これらの例をみると, [V:] として実現する音節が語頭のみならず, 語中, より正確に言えば, 複合語の後項にも現われている。それと同様のことは, 次にあげる N+V 型の複合名詞 (例: ‘wallet,’ ‘towel’) においてもみられる。

#### (10) 複合名詞 (N+V)

*qaji+kal-sdyaan* (head+CL-be.two) ‘ant’ (lit. be two-big-head);  
*quy+jin+gu* (sky+edge+PUT) ‘horizon’ (lit. sky edge-touches); *xilaa+gay-giləŋ*  
 (leaf+by.floating-BE.ON.THE.WATER) ‘waterlily’; *daalə+dagaa-ʔu* (money+have-  
 INST) ‘wallet’; *stlaa-ŋ+gisaa-ʔu* (hand-REFL.POSS+wipe-INST) ‘towel’ (lit.  
 (something) to wipe own hands with)

これらの複合名詞を作る語根にはそのままの形式で現われ得ないものがあり, 一定の形態音韻レベルの変容が働いているとみられる (例: *sdyaan* < *sdiŋ* ‘be two’; *xilaa* < *xil* ‘leaf’; *dagaa* < *daga* ‘to have’; *gisaa* < *gisuu* ‘to wipe’) が, 語彙的に固定されたものであり, 規則化できるわけではない。

これらが一つの単位をなす複合語であることは, 限定接尾辞が付加されることから分かる。それらの限定形の一部を示す。

#### (11) 限定形

*qajikalsdyaŋaay* ‘the ant’, *xilaagaygiləŋaay* ‘the waterlily’, *daalədagaaʔwaay*  
 ‘the wallet’, *stlaaŋgisaaʔwaay* ‘the towel’

このように, 複合名詞は, 語根 (あるいは語幹) が緩く接合されてできている点が形態的な特徴としてあげられる。それは, 形態音韻レベルの変容が少なく, あったとしても語彙的に固定されたものであること, また, 元の語根における /V/ タイプのライムが複合語において [V:] として実現することからも窺える。

続いて、派生語をみてみると、ハイダ語においてみられるのは、動詞語根から派生される出勤名詞のみであり、名詞語根に派生接辞が付いて派生語を作ることほとんどないとみられる。また、出勤名詞もそれに関わる接辞の種類は少ない。次にあげる (12a) は、動詞に接尾辞 *-ʔu* が付加され、その動作で用いられる道具を表わす名詞が派生されている例、(12b) は、母音変換によって動詞から名詞が派生されている例である。

(12) V > N 型の派生名詞 (出勤名詞)

- a. *k'ujaan-ʔu* (smoke-INST) 'pipe', *niijin-ʔu* (imitate-INST) 'mask',  
*da-q'ay-nənaan-ʔu* (by.pushing-CL-RUB-INST) '(clothes) iron', *gu-gaa-ʔuldəŋ-ʔu*  
 (by.burning-CL-ROOT-INST) 'flashlight', *kid-ʔga-gaan-ʔu*  
 (by.poking-CL-ROOT-INST) 'fork'<sup>9</sup>
- b. *ʔgaŋgulʒaa* 'job' < *ʔgaŋgulʒa* 'to work', *gyaagaan* 'totem pole' < *gyaagan* 'to stand', *k'adsgiid* ~ *k'adsgid* 'time' < *k'adsgid* 'to ring'

太字で示した /V/ タイプのライムが [V:] として実現する音節は、語頭だけでなく、語中に現われている場合もある (例: *kidʔga-gaan-ʔu* 'fork')。これに類することについては、動詞の形態法を扱う 3.2 で述べることにする。

(12a) に例示したような道具名詞を派生する *-ʔu* は、比較的生産性が高いものの、動詞から名詞を派生するような接辞は、他にはあまりない。

更に、ハイダ語には、(13) にあげるように、名詞と動詞の語根が同じ形式のもの、すなわちゼロ派生がみられる。

(13) ゼロ派生

- naan* 'game; to play', *xyaaf* 'dance; to dance', *gay* 'blood; bleed', *q'alʔud* 'mold; be moldy', *sk'uulə* 'crowd; be crowded', *tada* 'year, winter; be cold'
- Cf. *k'ad-ga-daal* (by.pounding-CL-ROOT) 'plank'

*k'adgadaal* (by.pounding-CL-ROOT) 'plank' は、手段接頭辞と類別接頭辞 (次節

<sup>9</sup> *kid-ʔga-gaan* という動詞はない。この語根は、(9b) に示した *ʒaŋas+gaan-ʔu* (shadow+ROOT-INST) 「鏡」と同形の *gaan* であるが、この「フォーク」においては動詞にしか付加されない手段接頭辞 *kid-* 「突くことによって」や類別接頭辞 *ʔga-* (対になった突起物をもつ物体を表わす) があるところを見ると、この *gaan* は動詞の語根とみるのが妥当である。

参照) が付く点で構造的には動詞であるが、「叩くことによって (=手段接頭辞の *k'ad-*) ドア状のもの (=類別接頭辞の *ga-*) を水平に動かす」という意味の動詞として使われることはないので、厳密に言えば、ゼロ派生ではない。

最後に譲渡不可能の対象物(親族名称と身体部位名称)を表わす名詞について触れておくと、それらの名詞には限定接尾辞 *-gaay* (~ *-aay*) が付加されないこと、他動詞節の目的語として現われた場合、その主語と所有者が同じであることを示す再帰所有接尾辞 *-ŋ* (例: *st'aay* 「足」→ *st'aayŋ* 「自分の足(を)」) が付加されること、所有句の構造が異なるなど、いくつかの点で譲渡可能所有を表わす名詞と形態統語的な振る舞いが異なる。しかし、譲渡可能の対象物を表わす名詞と同様、形態法は比較的単純である。

以上、名詞の形態法を略述してきたが、ハイダ語の名詞は、形態法が単純であり、結果としてできあがる名詞も複雑な構造をなすことはない。形態音韻レベルの規則も多くなく、その点からすれば、名詞を構成する形態素が緩く接合していると考えられる。

### 3.2 動詞

ハイダ語の動詞は、語根を核とし、それに主に時制を表わす屈折接尾辞が付加されることによって、述語として機能することができる<sup>10</sup>。従って、動詞は、必ず二つ以上の形態素からなり、単純語とはならない<sup>11</sup>。更に、これら必須の要素に、随意的な要素である派生接辞(接頭辞と接尾辞)とアスペクト・モード(AM)標識が付加され、時に比較的複雑な構造をなすことがある。(14)は、動詞の構造を大まかに示したものであるが、動詞に付く様々な要素のうち、AM標識は、アスペクトを表わす要素や否定、3人称代名詞の複数性を表わすものなどが含まれ、一つの語根に複数現われる場合は、一定の順序で付加される<sup>12</sup>。ここでいう屈折接尾辞もそのAM標識の一種であると考えられるが、それら屈折接尾辞は、必須の要素であること、また、互いに排他的で範例 paradigmatic 関係にあること、更に、他のAM標識にはあまりみられない複雑な形態音韻規

<sup>10</sup> 本節は、主に Hori (2016) に基づく。ここでは、「語」という単位をみることを目的としているので、動詞の形態法については、その議論に関わる部分だけを取り上げることにする。詳細については Hori (2016) を参照されたい。

<sup>11</sup> しかしながら、現代の話者の多くの発話においては、この屈折接尾辞が現われないことも多い(本稿の中にもそのような例がいくつかある)。

<sup>12</sup> これらが一つの範疇をなすとは考えにくいので、AM標識という名称は不適切であるが、派生接尾辞や屈折接尾辞とも振る舞いが異なるので、やはり別個の範疇として立てておく。

則があることから、ひとまずAM標識とは別個のものとしておく。

(14) ハイダ語の動詞の構造

接頭辞 -	語根	-派生接尾辞	-AM標識	-屈折接尾辞
			-di (durative)	-ga (nonpast)
			-xidi (inceptive)	-gən (past)
			-gu (3rd person plural)	-gaŋ (present)
			-gəŋ (negative)	-gaŋ (complementizer)
			-gəŋ (habitual) etc.	-s (relative nonpast)

動詞語根に屈折接尾辞やAM標識、接頭辞が付いた例を(15)～(17)にあげる(これまでと同様、/V/タイプのライムで [V̇:] として実現する音節を太字で示す。また、屈折接尾辞に下線を付す)。

(15) 動詞語根-屈折接尾辞

- a. taa-gəŋ (eat-past) ‘eat’ (past)
- b. **quyaa-ga** (be.precious-nonpast) ‘be precious’ (nonpast)
- c. q’uyda- (be.hungry[nonpast]) ‘be hungry’ (nonpast)

(16) 動詞語根-AM標識-屈折接尾辞

- a. gad-di-ga (run-durative-nonpast) ‘be running’ (durative, nonpast)
- b. taa-gu-**gəŋ-gəŋ** (eat-3pl-negative-past) ‘(they) did not eat’<sup>13</sup>
- c. qyaan**aa-gəŋ** (see[evidential]-past) ‘see’ (reportative past)

(17) 接頭辞-動詞語根-屈折接尾辞

- a. jid-k’udʔul**gəŋ** (by.shooting-die[past]) ‘shoot NP dead’ (past)
- b. giŋ-gayd**ən** (causative-run[past]) ‘make NP run’ (past) Cf. (16a)
- c. giŋ-**gaxiidən** (causative-dive[past]) ‘make NP dive’ (past)
- d. giŋ-**jiŋga-gəŋ** (causative-dig.shellfish-past) ‘make NP dig shellfish’ (past)

屈折接尾辞の中には、それ自体とその前の要素に対し、形態音韻的な変容を

<sup>13</sup> 文として働くには、主語となる3人称代名詞、否定の副詞 *gəm*が必要である。

加えるものがある ((15c), (17a~c)を参照)。つまり、それだけ前の要素との結びつきが強く、形態的な自立性がないことを示す。AM標識の中にも、形態音韻規則が働くものがあるが、屈折接尾辞ほど種類は多くなく、規則も複雑ではない。また、(17c, d)をみると、使役接頭辞 *giŋ-* が付加されても動詞の語根の第一音節が [V:] として実現していることにも注意されたい。

ハイダ語の動詞語根は、形態論的な振る舞いから、大きく二種類に分けられる。一つは、屈折接尾辞が付いただけでは語として完結せず、手段接頭辞と類別接頭辞の両方もしくはいずれか一方を必要とする語根であり、そのような語根を拘束語根という。もう一つは、それらの接辞を必要としない(但し、手段接頭辞は付き得る)語根であり、そのような語根を自由語根という<sup>14</sup>(上にあげた例はすべて自由語根である)。拘束語根に手段接頭辞や類別接頭辞が付いた例は、次の通りである(グロスでは、拘束語根の意味はスモールキャピタルで示す)。

(18) a. 手段接頭辞-拘束語根

**xi-c'i** (with.elbow-SHIFT) 'to nudge', **gi-jigid** (by.grabbing-HOLD) 'to hold',  
**sq'a-k'adəŋ** (with.stick-STRIKE) 'to beat with a stick'

b. 類別接頭辞-拘束語根

**ʔgi-gudi** (CL-LIE) '(a log-like object) to lie', **qu-daga** (CL-MAKE.A.SOUND) 'to make a putt-putt sound'

c. 手段接頭辞-類別接頭辞-拘束語根

**nana-gu-gid** (by.staggering-CL-MOVE.FAST) '(a humpbacked person) to move fast by staggering'  
**dəŋ-k'u-st'a** (by.pulling-CL-REMOVE) 'to pull out (a block-like object)'  
**da-sk'a-xunəŋ** (by.pushing-CL-ROLL) 'to roll (a bottle-like object) by pushing'

これらの例をみると、太字で示した音節(音声的に [V:] として実現する /V/ タイプのライムをもつ)は、手段接頭辞と類別接頭辞に現われている。その際、その前に使役接頭辞が現われていても、やはり [V:] として実現する(後述参照)。一方、拘束語根は、たとえ /V/ タイプのライムであっても、音声的に [V:]

<sup>14</sup> そもそも語根は拘束形式なので、「拘束」と「自由」とするよりも、「制限的restricted」と「自在的versatile」とするのが適切であろう(この術語についてはChao 1968を参照)。

として実現することはない（例：(18a)の *c'i*, *jigid* の第一音節など）。

次に複合動詞をみると、その前項と後項となる語根（語幹）の品詞性から、N+V型（いわゆる名詞抱合 noun incorporation）とV+V型の二種類が認められる。そのうち、N+V型の複合動詞は語彙的に限られており、それに現われる名詞を他の名詞に置き換えて新しい複合動詞をつくることはできない。また、N+Vの複合動詞の全体の意味を、前項のNと後項のVの表わす意味から推測することができない点においても、かなり語彙化していることがみてとれる。次にあげる(19)は後項となる動詞が自由語根の場合、一方、(20a)は後項となる動詞が拘束語根 *gal* に類別接頭辞 *dlə-* が付いた場合、(20b)は同じく拘束語根 *nɬgwaan* に手段接頭辞 *c'i-* が付いた場合を示している。

(19) N+V型の複合動詞（=名詞抱合 noun incorporation）（V：自由語根）

- a. *gudəŋaay+st'i* (heart+ache) 'to feel sorry'
- b. *skuji+gəw* (bone+disappear) 'to be surprised'
- c. *giw+gəw* (ear+disappear) 'to be mischievous'

(20) N+V型（V：語幹）

- a. *sgaa+dlə-ga* (spirit+CL-PICK.UP[PL]) 'to hire shamans' (Swanton 1905: 61)
- b. *χidʔiid+c'i-nɬgwaan* (bird+by.shooting-CONTACT?) 'to hunt birds' (Swanton 1905: 59)

一方、V+V型の複合動詞の例は、次に示す通りである。いずれも後項となる動詞が前項を修飾するような関係にある（その意味関係を〈〉に入れて示す）。

(21) V+V型

- a. *χagugaay* ʔaŋga 'la qada+q'əw-ʔu-di-gən. 〈位置〉  
the.halibut own she slice+sit-SG-DUR-PAST  
'She was slicing the halibut, sitting.'
- b. *tləsdaa* ʔə=q'əw+cuu-juu-gəŋ-giin-ii. 〈様態〉  
long.ago I=sit+CL-ROOT-HABITUAL-PAST-INFO  
'Long time ago, I used to sit up straight.' (*cuu-*：まっすぐなものを示す類別接頭辞)

c. gaay=gagən='uu 'lə=gaydləgiŋ+jiiŋaa. <経過時間>  
 that=because=FOC it=float+long

'That is why it floated for a long time.'

d. ʔaa gə taa+qwaan-gən. <程度・量>

I INDF eat+much-PAST

'I ate lots.'

これらの例に現われる前項と後項のいずれも述語を構成する核となり得るものである。また、(14)にあげた動詞を構成する諸要素のうち、AM標識と屈折接尾辞は、これらの複合語の後に付加されることから、これらが一つの単位をなすと見做することができる<sup>15</sup>。

以上、ハイダ語における複合動詞についてまとめると、N+V型のようにその構成要素から意味が予測できないものがあるが、総じて、個々の要素の意味的な透明性が高く、全体の意味が予測できる場合が多い。それは、音韻面においても、形態音韻的な変容がほとんどみられない点、更に、/V/タイプのライムが音声的に [V:] として実現することにも現われており、全体的に構成要素が緩く接合しているといえる。

動詞を構成する要素として最後に派生接尾辞をあげると、派生接尾辞はその種類が多く、時として複数のものが同じ動詞語根に付加されることがあり、複雑な動詞を構成することに与っている。それらの派生接尾辞を意味の面から分類すると次のようになる。

## (22) 派生接尾辞の意味分類

### a. 位置・方向・場所

-ʔin 'go on vehicle', -ga 'go on foot'; -ʔə 'upward', -t'at 'downward', -t'as 'across'; -juu 'return from', -giŋ 'on the water'

### b. 状態の変化

-giiʔ 'become', -sdlə 'completely'

<sup>15</sup> 但し、派生接尾辞のうち、方向を表わすものは、前項に付加される。次の例では、-ga 'go on foot' が前項 *qyaŋ* ('qiy' 'to see' の異形態) に付加されている。

ʔawuŋ=dəŋʔad 'laa t'aləŋ qyaŋga+gad.  
 own.mother=with him we see[go.on.foot]+run  
 'We ran to see him with my mother.'

c. 様態

-gayaagad ‘accidentally’, -daxid ‘right away’

d. 時間

-tlaagəŋ ‘first’, -gudsdlə ‘last’, -ʔuʔə ‘early in the morning’, -sk'idcaa ‘before leaving’

e. 意志

-guda ‘want to V’, -siŋ ‘wish to V’, -t'ajŋ ‘try to V’

f. ヴォイス

-da ‘causative’, -gaa ‘stative/anticausative’

g. 程度

-gudsdlə ‘very’, -jəʔii ‘very’

h. 可能性

-ʔəŋaa ‘possible/able to V’, -sgi ‘fail to’

ここでは、これらの接尾辞の承接順序や意味上の共起制限については詳述せずに、いくつかの例を(23)にあげるにとどめておく（詳細はHori 2016を参照）。

- (23) a. q'ad=gi      χaw-ʔin-sga-s=gyaan ...  
offshore=to fish-go.on.vehicle-to.clear.space-NONPAST=when  
‘When (we) went out fishing, ...’
- b. c'iw    ʔun=gu    'lə=naaŋ-ga-juu-s.  
board top=on she=play-go.on.foot-return.from-NONPAST  
‘She came back from playing on a board.’ (Swanton 1905: 77)
- c. gandlaay=gii='uu      ciinaay    ʔwaadləwχan  
the.water=into=FOC the.fish all  
'la daaŋ-gi-daal.  
he throw-into.water-along  
‘He threw all the fish into the water.’
- d. kiŋaŋ      'la    q'aaləŋ-daxid-ʔəŋaa-gən.  
own.name he write-right.away-be.able-PAST  
‘He could write down his name right away.’

派生接尾辞もやはりその前の要素に何らかの変容を与えることはほとんどな



く、その点でいえば、それらの接尾辞は緩く接合しているといえる。一部の派生接尾辞において /V/ タイプのライムが [V:] として実現していることはあるが、基本的に前の要素とともに語の一部をなしている<sup>16</sup>。また、意味の面においても、多くの場合、多少語彙化することがあるにしても、それぞれの意味の透明性が保たれている。

#### 4. 接語

接語には、まず、①場所・空間・位置関係（「で」「から」「へ」など）や時間的な前後関係（「前」「あと」「間」など）、随伴（「と（一緒に）」「なしに」）、受益（「ために」）などを表すもの（いわゆる後置詞）<sup>17</sup>があり、これらがホストに最も近い位置に現われる。更に、②強意（「とても」「まさに」など）、談話標識（焦点標識、疑問標識、限定標識「のみ、だけ」など）、③節連結標識（「から」「時」「そして」など）が後続する（いずれも前接語 enclitic）。これらのうち、②の接語は、原則として、節の中の最初に現われる語や句に付加されるという位置上の制約がある。これらの接語は、語として完結した単位に接続するものであり、接辞と見紛うことはない。

接語同士の承接順序については明らかにし得ていないが、Enrico (2003: 44) に従えば、②の接語は、次のような順序でホストあるいは①と③の接語に付加される（表記は本稿のものに改変して示す）。

#### (24) 前接語の承接順序 (Enrico 2003 を一部改変)

ホスト	1	2	3	4	5
	=jəʔii 'exactly'	=ɣan 'even'	=ʼuu focus	=ʔəsiŋ	=ʔaa
	=kʼudɣan 'on purpose'	=sgun 'only'	=gwa	'also'	fragment
	=gwaadi	=tlʼə ~ =tlʼaa	interrogative		
	'approximately'	'but'	=ʔa imperative		
	=gaŋəŋ 'like'			etc.	
	etc.				

\* ホストが複音節であれば =tlʼə, 単音節であれば =tlʼaa が現われる。

<sup>16</sup> /V/ タイプのライムをもつ派生接尾辞のうち、どのようなものが [V:] として実現するかについては 5 節で考察する。

<sup>17</sup> これらのあるものは、その本来の意味に加えて、二項動詞の目的語の標識となることがある。例え

それらの接語が付いた例は次の通りである。

- (25) a. gud=?ad=χan (each.other=with=even)  
b. yaan=jəʔii=χan (truly=very=even) (Swanton 1905: 31)  
c. q'uy=gii=tl'aa='uu (ground=into=but=focus)  
d. sk'agi=gi='uu=?əsiŋ (dog.salmon=to=focus=too)  
e. ʔtangu=sgun=χan (feather=only=even) (Swanton 1905: 37)

Enrico (2003) は、(24)のそれぞれの位置に現われる接語は、互いに排他的であり、共起することがないとするが、(25e)にあるように、同じ位置に現われるとされる =scun 'only' と =χan 'even' が共起することがあるゆえに、この (24) は更に検討する余地があると思われる。

形式面でいえば、前接語には単音節のものも複音節のものもある。複音節の前接語のいくつかは単音節のそれを構成要素に含むことがある (例: =giisda 'out of'; =gii 'into', =sda 'from' など)。また、単音節の前接語のうち、/V/ タイプと /VO/ タイプのライムをもつものは、多くの場合、そのピッチは、前の音節のそれによる。例えば、

- (26) a. 'laa=sda (him/her=from) /'laa.sda/ [ʔlá:.sda] 'from him/her'  
b. gud=sda (each.other=from) /gud.sda/ [gùt.sdà] 'from each other'

このことから、前接語は音韻的に自立度が低く、前のホストと一つの単位をなすとみることができる。しかし、①と③の前接語では、そのホストとなる名詞句が文脈から明白である時、その名詞句が省略され (つまりゼロ照応)、前接語だけが現われることがある。その場合、/V/ タイプのライムをもつ前接語は [V:] として実現する。例えば、

- (27) a. φ=sda /sda/ [sdà:] 'from φ'  
b. φ=gi /gi/ [gi:] 'to φ'

---

ば、NP=*gi haʔa* 'to gather NP' (=giは本来的には方向を表わす)、NP=*can ʔunsid* 'to know NP' (=canは本来的には受益を示す) など。

一方、複音節からなる前接語でその第一音節が /V/ タイプのライムは、[V:] として実現する。すなわち、

- (28) a. tləw=guga (boat=on.board) /tləw.gu.ga/ [tʰú:.gù:.gà] ‘on a boat’  
b. dəŋ=gəŋəŋ (you=like) /dəŋ.ga.ŋəŋ/ [dəŋ.gà:.ŋəŋ] ‘like you’  
c. kun=gaduu (point=around) /kun.ga.duu/ [kún.gà:.dú:] ‘around a point’

このような例を見るに、ハイダ語の前接語は、音韻的な自立度は単音節のものほど低く、音韻的なふるまいは接辞に近いともいえる。しかし、(27) や (28) のような場合に音声的に [V:] として実現することから、前接語は音韻的に自立した語のように振る舞うこともある。

ハイダ語には、更に、後接語 proclitic もあるが、それらは、人称代名詞の *ʔə* (1人称単数動作者格) と *ʔə* (3人称), *ʔə* (不定3人称複数) に限られる。いずれもホストとなる語の前に付加される。

## 5. 音韻的な語と文法的な語

これまで音韻的な語と文法的な語について、前者は主に各音節が担うピッチの現われ (とりわけ [V:] の分布) から、後者は形態素間の緊密性や接辞の現われ方から、それぞれを捉えてきた。本節では、それらの関係について考察を加えることにする。

すでに見たように、単純語 (名詞の場合) においては、音韻的な語と文法的な語は一致する。それに対し、複合語は、(29) に示すように、両者が一致する場合と一致しない場合がある (a は複合名詞, b と c は複合動詞の例)。

### (29) 複合語

- a. ʔk'yaan+q'ust'an (forest+crab) ‘frog’ (N+N型)  
b. gudəŋaay+st'i (heart+ache) ‘to feel sorry’ (N+V型)  
c. taa+gudəŋ (eat+want) ‘to want to eat’ (V+V型)

これらは、いずれも形態的には一つの語であるが (但し, b と c は動詞であるため、更に屈折接尾辞を必要とする)、音韻的にみれば、太字で示した音節のライムが音声的に [V:] として実現するゆえに二つの単位からなるとみられる。

続いて、動詞の自由語根に様々な接頭辞が付加された場合をみてみると、自由語根の第一音節が /V/ タイプのライムであれば、その音節は、やはり [V:] として実現する。次にあげるのは、自由語根に使役接頭辞が付いた場合である。

(30) 〈使役接頭辞 *giŋ-* 自由語根〉

- a. /giŋ.ga.xid/ [giŋ.gà:çit] ‘to let somebody dive’ cf. (17c)  
 b. /giŋ.ji.ga/ [giŋ.ǰʒi:.gà] ‘to let somebody dig shellfish’ cf. (17d)  
 c. /giŋ.k’u.dlən/ [giŋ.k’ù:.dl̥ɪn] ‘to let somebody paint (NP)’

また、接頭辞には、他動詞がとる二つの名詞項のうち、目的語を削除して自動詞に変換する自動詞化接頭辞 *ta-* がある<sup>18</sup>。例えば、

(31) 〈自動詞化接頭辞 - 語根〉

- a. /ta.st’i.da/ [tâ:.st’i:.dà] ‘to stop from doing’ < *st’ida* ‘to stop (NP) from doing’  
 b. /giŋ.ta.k’u.dlən/ [giŋ.tâ:.k’ù:.dl̥ɪn] ‘to let somebody paint’  
 < *k’udlən* ‘to paint (NP)’

(31b)に示すように、この自動詞化接頭辞の前に更に使役接頭辞 *giŋ-* が付加されても、その自動詞化接頭辞は [V:] として実現している。Enrico (2005: 106) は、この *ta-* を接頭辞ではなく、「鮭」を意味する名詞に由来すると見ており、(31)にあげたような例は名詞抱合の一種として扱っている。この接頭辞を「鮭」という名詞に結びつけるその解釈が妥当であるとするならば、どのようなプロセスを経て(31)のような「鮭」とは関係のない動词语根と結びついて、それを自動詞化する働きを担うようになったのかという説明が必要であるが、この自動詞化接頭辞の音韻的な振る舞いをみる限り、この接頭辞が名詞に由来するという解釈もあり得るのかもしれない。

接頭辞には、他に手段接頭辞と類別接頭辞がある。(32)は手段接頭辞が自由語根に付加された場合の例である。

<sup>18</sup> 但し、厳密に見れば、この接頭辞は自動詞にも付加されることがある(例: *ta-t’iit* < *t’iit* ‘be wet’) ので、自動詞化接頭辞と称するのは適切ではない。

(32) 〈手段接頭辞 - 自由語根〉

- a. /st'a.gu.naan/ [st'â:.Gù:.ná:n] 'to be bare-footed'  
|st'a-gunaan| (by.foot-be.naked)
- b. /da.hi.ga/ [dâ:.hî:.gà] 'to straighten something by pushing'  
|da-higa| (by.pushing-be.straight)
- c. /q'u.k'u.yiŋ/ [q'ù:.k'ù:.yiŋ] 'to make oneself happy by eating'  
|q'u-k'uyiŋ| (by.eating-be.happy)

(32) に現われる自由語根は、いずれも第一音節が /V/ タイプのライムであり、音声的に [V:] として実現しているのはこれまでみてきた例で確かめた通りである。これらの例において、自由語根の前に付加された /V/ タイプのライムをもつ手段接頭辞もやはり [V:] として実現しており、それだけ音韻的な自立度が高いといえる。

手段接頭辞のこのような音韻的な振る舞いは、そのいくつかが歴史的に名詞あるいは動詞に由来することと関係していると考えられる。例えば、

(33) 名詞・動詞語根と手段接頭辞

- a. t'aŋəl 'tongue' : t'aŋ- 'with tongue'
- b. c'iŋ 'teeth' : c'iŋ- 'with teeth'
- c. st'aay 'foot' : st'a- 'with foot'
- d. q'ud 'to be hungry' : q'ud- 'with hunger'
- e. naaŋ 'to play' : naaŋ- 'by playing'

(33a) から (33c) は名詞との形式的な類似性（あるいは同一性）から名詞抱合、(33d) と (33e) は動詞との形式的な類似性（あるいは同一性）から複合動詞との関連性が窺える（但し、3 節でみたように、複合動詞においては、前項が後項の手段あるいは動作の方法を表わすというような意味関係にあるものはみられない）。手段接頭辞が音韻的な自立性をもっているのは、名詞あるいは動詞語根に由来することも関係していると考えられよう。

一方、類別接頭辞は、先にも述べたように、拘束語根にしか付加されない。(34a) は類別接頭辞、(34b) は手段接頭辞と類別接頭辞の両方が拘束語根に付加された例である（/V/ タイプのライムの手段接頭辞、類別接頭辞に下線、拘束語根の第一音節に波線を付す）。それらの例において、手段接頭辞と類別接頭辞

は、/V/ タイプのライムであれば音声的に [V:] として実現するのに対し、拘束語根は同じタイプのライムであっても [V:] として実現せず、母音は短母音のまま、その音節が担うピッチはその前の音節のそれに依る。

- (34) a. /t̩gi.gu.di/ [t̩gì:.gù:.dì] |t̩gi-gudi| (CL-LIE) ‘(a log-like object) to lie’  
 /qu.da.ga/ [qù:.dà.gà] |qu-daga| (CL-MAKE.A.SOUND) ‘to make a putt-putt sound’
- b. /na.na.gu.gid/ [nà:.nà.gù:.gìt] |nana-gu-gid| (by.staggering-CL-MOVE.FAST)  
 ‘(a humpbacked person) to move fast, staggering’  
 /dəŋ.k’u.st’a/ [dəŋ.k’ù:.st’à] |dəŋ-k’u-st’a| (by.pulling-CL-REMOVE) ‘to pull out (a block-like object)’  
 /da.sk’a.xu.nəŋ/ [dà:.sk’à:.xù.nəŋ] |da-sk’a-xunəŋ| (by.pushing-CL-ROLL)  
 ‘to roll (a bottle-like object) by pushing’

(34)をみると、拘束語根のピッチがその前に現われる手段接頭辞や類別接頭辞のピッチに依存していることから、拘束語根は、音韻的な自立性がないといえる。拘束語根が前に現われる要素に依存していることは、拘束語根の意味そのものが捕捉しがたく、それに付加される手段接頭辞や類別接頭辞が有する具体的な意味によって、その語幹全体の意味が明瞭になるという点にも窺える<sup>19</sup>。つまり、意味の面においても、拘束語根は、それらの接頭辞に対して従属的であるといえる。

一方、接尾辞についてみると、接尾辞のほとんど多くは一音節からなり、わけても /V/ タイプのライムをもつ接尾辞の多くは、[V:] となって現われることがほとんどなく、そのピッチは、専ら先行する音節のそれに従って決まる。次にあげるのは、/V/ タイプのライムをもつ接尾辞 (AM 標識と屈折接尾辞) がそれぞれ高ピッチを担う語根と低ピッチを担う語根に後続している例である。

- (35) 〈動詞語根 -AM 標識 - 屈折接尾辞〉
- a. /taa.di.ga/ [tá:.di.gà] |taa-di-ga| (eat-durative-nonpast) ‘be eating’ (nonpast)
- b. /gad.di.ga/ [gàt.di.gà] |gad-di-ga| (run-durative-nonpast) ‘be running’ (nonpast)

<sup>19</sup> グロスにおいて、拘束語根に対して ROOT としか付していないのは、そうした事情による。

(35a)ではAM標識の *-di* と屈折接尾辞の *-ga* が高ピッチの語根 *taa* ‘eat’ の後に現われているために中ピッチを担っているのに対し、(35b)では同じ接尾辞が低ピッチの語根 *gad* ‘run’ の後に現われているために低ピッチを担っている。このように、/V/ タイプのライムをもつAM標識や屈折接尾辞のピッチは、それらの前に現われる要素（語根だけとは限らない）によって決まる。言い換えれば、/V/ タイプのライムが続く限り、それらのライムは、その前の要素が高ピッチであれば中ピッチ、低ピッチであれば低ピッチを担うということである。

続いて、派生接尾辞についてみると、派生接尾辞も一音節のものは、/VO/ と /V/ タイプのライムの場合、そのピッチは、やはり前に現われる要素のピッチによって決まる（/VV(C)/ タイプのライムや /VR/ タイプのライムは高ピッチを担う）。(36)にその例を示す（ここでは、動詞語根と派生接尾辞の部分だけを示す）。

(36) 〈動詞語根-派生接尾辞〉

- a. /kʰaa.tʰa.gi/ [kʰá:.tʰa.gi] |kʰaatʰa-gi| (throw-into.water) ‘to throw something into the water’  
 b. /gad.gi/ [gàt.gi] |gad-gi| (move-into.water) ‘to fall into the water’

派生接尾辞 *-gi* ‘into the water’ の前に現われる音節が中ピッチを担うか ((36a)), 低ピッチを担うか ((36b)) によって、それ自体のピッチが決まることは、上にみたAM標識や屈折接尾辞の場合と同じである。すなわち、派生接尾辞もそれらの接尾辞と同様、音韻的な自立性はなく、あくまでも音韻的な語の一部であることが分かる。

しかし、派生接尾辞の中でも二音節からなるものでその第一音節が /V/ タイプのライムをもつ場合は、その音節が [V̇:] として実現する。次の(37)において、*-gayaagad* ‘happen to V’, *-daxid* ‘right away’, *-guda* ‘want to V’, *-tʰajij* ‘try to V’ のそれぞれの第一音節が [V̇:] となっているのに注意されたい。

(37) 〈動詞語根-派生接尾辞 (二音節)〉

- a. /dlə.xid.ga.yaa.gad/ [dľ̩].çit.gà:.yá:.gat] |dlə-xid-gayaagad| (CL-PICK.UP-happen) ‘to happen to pick something up’  
 b. /qʰaa.ləŋ.da.xid/ [qʰá:.ləŋ.dà:.çit] |qʰaaləŋ-daxid| (write-right.away) ‘to write something right away’

c. /suu.da.gu.da/ [sú:.da.gù:.dà] |suuda-guda| (tell-want) ‘to want to tell somebody’

d. /scal.t’a.jiŋ/ [sgál.t’à:.ḍǰiŋ] |sgal-t’ajiŋ| (hide-try) ‘to try to hide something’

これらの接尾辞が副詞などの自立語や動詞の語根と歴史的な関係が認められるわけではなく、その点では、上でみた手段接頭辞や類別接頭辞とは異なり、専ら音韻的な構造からこのように音声的に実現しているのではないかと考えられる。但し、第一音節が /V/ タイプのライムをもつ派生接尾辞のすべてが (37) にあげたそれと同じ振る舞いをするわけではない。例えば、(38) にあげる *-gigaŋ* ‘(moving) along’ の第一音節は /V/ タイプのライムであるにも拘わらず、[V:] として実現しない。

(38) /qaa.gi.gañ/ [qá:.gi.gán] |qaa-gigaŋ| (walk-along) ‘to walk along’

/ʔaaʔ.juu.di.gwaan/ [ʔá:ʔ.ḍǰú:.di.gwá:ŋ] |ʔaaʔjuu-digwaan| (behave-all.the.time) ‘to behave all the time’

(37) と (38) の派生接尾辞のこうした振る舞いの違いは、おそらくその承接順序と関係していると考えられる。すなわち、(38) の接尾辞は、動詞語根に最も近いところに付加され、語根と接尾辞の間に他の接尾辞が入ることがなく、それゆえに、他の派生接尾辞に比べ、それだけ語根に対して形態面での依存度が高いといえる。第一音節が /V/ タイプのライムであるにも拘わらず、それが [V:] として実現していないのは、その形態面での依存度の高さ（あるいは、自立度の低さ）を示すと見做すことができよう。派生接尾辞の承接順序に関して付言しておく、この接尾辞に限らず、とりわけ位置や方向を表わす接尾辞は、動詞語根に最も近い位置に現われる傾向にある<sup>20</sup>（詳しくは Hori 2016 参照。また、注 15 にあげた複合動詞 *qyaanŋca+gad* (see[go.on.foot]+run ‘to run to see’ に おいて、派生接尾辞 *-ga* が前項の動詞に付加されている例も参照)。

以上述べてきたことをふまえて、ハイダ語のピッチの現われから音節の種類を分けてみると、まず、必ず高ピッチとなって現われる /VV(C)/ と /VR(C)/ タイプのライムを持つ音節がある。そのような音節を「ピッチ付与音節」と呼ぶ

<sup>20</sup> 他にも、*-gidoŋ* ‘to start,’ *-cagi* ‘to leave on boats’ などと同様に、その第一音節は、/V/ タイプのライムであるが、いずれも動詞語根に近い位置に現われ、[V:] として実現しない。



ことにする。また、/V/ タイプと /VO/ タイプも自由語根（名詞の語根も含む）の第一音節、接頭辞、また一部の接尾辞に現われる場合には、低ピッチとなって現われることから、やはりピッチ付与音節と見做す。それ以外に現われる /V/ タイプと /VO/ タイプの音節のピッチは、それらピッチ付与音節によって決まることから、音韻的に随伴的であるといえる。そのような音節を「随伴的音節」と称することにする。

ピッチの現われから、このように音節を「ピッチ付与音節」と「随伴的音節」に分けてみると、それらの音節と形態素の種別の関係は次のように示される（「第二音節」とあるのは、「第二音節以降」の意）。

(39) 形態素の種別とピッチの現われの関係

	自由語根		拘束語根		接頭辞	接尾辞	接語
	第一音節	第二音節	第一音節	第二音節			
a. [V̇:(C)]	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
b. [VṘ(C)]	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
c. [V̇:]	✓				✓	(✓)	(✓)
[V]		✓	✓	✓		✓	✓
[V̇]		✓	✓	✓		✓	✓
d. [V̇O]	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
[VO]		✓	✓	✓		✓	✓

\* a: /VV(C)/, b: /VR(C)/, c: /V/, d: /VO/

\* 横の破線は、ライムのタイプの境界を示す。

\* 四角で囲ったのは「随伴的音節」。但し、[V̇O] は、自由語根の第一音節と接頭辞に現われる場合は「ピッチ付与音節」である。

これをみると、四角で囲われた随伴的音節は、自由語根の第二音節以降、拘束語根、接尾辞、接語に現われ、形態的にも、また、音韻的にも自立度は低い。これらは、新たにピッチ付与音節が現われない限り、同じピッチを担うことになり、それが及ぶ範囲は、形態的な語のそれにほぼ一致する。なぜなら、例えば、/VO/ タイプのライムをもつ音節が新たな形態的な語の初頭音節に現われれば、それはピッチ付与音節として低ピッチを担うからである。すなわち、

- (40) dii gidga gad-di-ga.  
my child run-DUR-NONPAST  
[dí: git.gà gàt.dì.gà]  
'My kid is running.'

(40)において、*gidga* 'child' の第一音節 *gid* に付与されたピッチはその次の *ga* に及ぶだけで、動詞語根 *gad* 'run' の低ピッチは新たにその音節に付与されたものである。この場合、*gidga* の第二音節 *ga* と動詞語根 *gad* のストレス（強勢）を比べてみると、聴覚印象的には後者の方が明らかに強い。更にいえば、ハイダ語において、ピッチ付与音節にはストレスが置かれる一般的傾向があるといえるであろう。

一方、(39)を縦にみると、自由語根の第一音節、接頭辞、接尾辞の一部は、形態的には種別が異なるものの、音声的に実現するピッチの現われが一致しており、音韻的な振る舞いが同じであることが分かる。とりわけ /V/ が [V:] として実現するのは、必ずしも形態的な語と軌を一にするわけではなく、そうした点でみれば、そこに音韻的なふるまいとの不一致がみられるといえる。更にいえば、このような音声の実現は、音韻的な条件のみで予測することができず、形態法に関わる情報も必要である。そうした点において、専ら音節構造から予測できる高ピッチの付与とはレベルが異なるといえる。

## 6. 語根と接辞、接語と接辞

ハイダ語における語の構成要素を形態的な自立度の尺度とし、一方、ピッチ付与音節と随伴的音節の現われを音韻的な自立度の尺度として、これまで述べてきたことをまとめると、おおよそ次のようになるであろう。

(41) 語根・接辞・接語の形態的自立度と音韻的自立度

		音韻的自立度	
		高 ←	→ 低
形態的自立度	高 ↑ ↓ 低	名詞語根	←
		接語	複音節 ← → 単音節
		動詞語根	自由語根 ← → 拘束語根
		接頭辞	接頭辞 ←
		派生接尾辞	二音節 ← → 単音節
		AM 標識	→
	屈折接尾辞	→	

名詞語根は、単純語として現われることもあり、すべてのピッチ付与音節が現われるので、形態的にも、また、音韻的にも自立度が高い。接語も形態的な自立度は高いが、音韻的にみれば、複音節のものはピッチ付与音節が現われるのに対し、単音節のものは必ずしもすべてのピッチ付与音節が現われるわけではない（但し、先に述べたように、ゼロ照応の場合は、ピッチ付与音節となり得る）。動詞語根からその下はすべて形態的な語の一部であるので、形態的な自立度は低い。音韻的な自立度は、ピッチ付与音節の現われによって、接頭辞のように高いものから、屈折接尾辞のように低いものまで様々ある。

ところで、先に述べたように、ハイダ語の動詞を構成する要素のうち、手段接頭辞と類別接頭辞は、（それらのすべてについて確認はできないものの、少なくとも一部に関しては）特にピッチの現われといった音韻的な振る舞いをみると、互いにゆるく接合していると考えられる。それらの接頭辞は、他の複合語と同様に、名詞や動詞として機能していたものがゆるく動詞語根と接合して、名詞抱合や複合動詞をなし、次第に石化してそのまま動詞の中に留まったと考えられる。これら二つの接頭辞に関しては、おそらく語根から接辞への一方向的な変化であったと推測できる。

一方、動詞の拘束語根と動詞に付く派生接辞の間（下記の(42a～d)）、語根と接語の間（(42e)）、接語と接辞の間（(42f, g)）においても、形式上、意味上の類似性あるいは関連性がいくつかみられる。

(42) 語根～接辞，接語～接辞

- a. CL-gi '(a classifier-type object) to move on the water' : -gi 'into water'
- b. CL-c'i 'to poke (a classifier-type object) into' : -c'i 'into'

- c. CL-daal '(a classifier-type object) to move along' : -daal 'along'
- d. CL-ginj '(a classifier-type object) to be on the water' : -ginj 'on the water'
- e. yahk'ii 'the truth' : =yahk'ii 'exactly'
- f. =di 'during, while' : -di durative
- g. =jəfii 'very' : -jəfii 'very'

これらの組のそれぞれにおいて、いずれが古く、いずれの方向によって文法化したのかについては、目下、明確な答えとそれを裏付ける証拠を持ち合わせていないが、ハイダ語においては、かつては、様々な要素が形態的な語の「中」と「外」をいくらか自由に入出入りし、互いに緩く結合していたのではないかとと思われる。つまり、接辞として語の中に現われる要素が語の外に現われたり、あるいは自由形式として現われるものが拘束形式として現われたりするなど、形態素の種別間をいくらか自由に動くことができるものがあつたのではないかと考えられる。また、ハイダ語においては、屈折接尾辞にかかるものを除いては、形態音韻的な変容が生じることが比較的少ない。それは、個々の形態素の結びつきの度合いが緩いことの現われとも考えられる。あるいは、形態素間の結びつきの緩さが、こうした形態素の種別間を動く自由度を許容しているとも見做せるのではないかとと思われる。

本稿では、ハイダ語における形態的な語と音韻的な語の捉え方、更に、その両者の関係についてみてきたが、とりわけピッチ付与音節の現われが形態素の種別と一致しないことがあるのは、問題となる形態素が本来的にもっていた音韻的な振る舞いを保ちつつ、形態的な語の中に取り込まれた結果ではないかと考えられる。言うまでもなく、音韻面での接合度と形態面での統合度は、それぞれ形式（表現）と内容（意味）に関わるものであり、別のレベルに属することから、その両者が完全に一致することはないであろう。少なくともハイダ語においては、形態面での統合度が高められる一方、音韻面での接合度が十分に高められず、形態的な語の中に現われる要素がその本来的な音韻的な振る舞いを保つたのではないかと考えられる。

## 参考文献

- Chao, Yuen Ren. 1968. *A grammar of spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Dixon, R. M. W. 2002. Word: A typological framework. Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) 2002. *Word: A cross-linguistic typology*: 1–41. Cambridge: Cambridge University Press.
- Enrico, John. 2003. *Haida syntax*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- . 2005. *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks and Juneau: Alaska Native Language Center and Sealaska Heritage Institute.
- Hori, Hirofumi. 1996. Pitch Assignment Rules in Skidegate Haida. 『言語研究』第110号: 28–51, 日本言語学会.
- . 2016. “Polysynthesis” in Haida. Kurebito, Tokusu (ed.), *Linguistic Typology of the North*, Vol. 3: 23–58. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- 堀 博文 2001. 「ハイダ語（北米インディアン諸語）の声調について」, 『音声研究』第5巻第1号: 28–36, 日本音声学会.
- 宮岡伯人 2015. 『語とはなにか・再考 日本語文法と文字の陥穽』三省堂.
- Swanton, John R. 1905. *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. (Bureau of American Ethnology, Bulletin 29), Washington, D. C.: Government Printing Office.

\* ハイダ語のデータを提供してくださった話者は次の方々である（イニシャルと生（没）年，男女 [m/f] の別のみ記す）。

RJ (1924–, m), ER (1921–2010, f), EW (1913–2009, m), AY (1924–2002, f)  
*Dii gi tllgiidan sgawdagi dallng ga hll kil'laaga. Haw'a!*

\* 本稿は日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））「ハイダ語の統語法に関する記述研究」（研究代表者：堀 博文，課題番号：19K00547）による研究成果の一部である。

(Abstract)

## Word in Haida: Mismatch between its phonological and morphological features

HIROFUMI HORI

“Word,” in general, can be defined by the morphological as well as phonological criteria; the former defines “grammatical word” while the latter defines “phonological word” (Dixon 2002). The present study discusses the mismatch between the phonological and grammatical word in Haida, a language isolate spoken off the northwest coast of British Columbia in Canada.

In Haida, noun morphology is relatively simple, consisting of a root with a few optional morphemes. Compounds and deverbal nouns are also observed, but they are lexicalized and lack productivity. On the other hand, a verb can pack quite a few morphemes in the domain of a word, thus producing a fairly complicated word that shows a polysynthetic nature.

On the phonological level, phonetic pitch that occurs in a syllable can work as a criterion to define a phonological word in Haida. Phonetically, three levels of pitch are observed in Haida, namely high (H), mid (M), and low (L) pitch that can be predicted from a rhyme of the syllable on which each pitch occurs. H can occur on /VV(C)/ and /VR(C)/ (where /R/ includes /m, n, ŋ, w, y, l/) being phonetically realized as [V̇:(C)] and [V̇R], while L can occur on /V/ being realized as [V̇:] or [V̇], depending on where they occur in a grammatical word, and /VO/ (where /O/ includes obstruents) being realized as [V̇O]. M occurs in the second and the following syllables only when the preceding syllables bear H. /VV(C)/ and /VR(C)/ are assigned a high pitch irrespective of the position they occupy in a grammatical word, so they can be defined as “pitch-assigned syllable.” On the other hand, occurrences of [V] and [V̇] are highly restrictive in that they never occur in the first syllable of a grammatical word and depend on the pitch of the preceding syllables. In other words, they lack phonological independence, and thus, are defined as “concomitant syllables.” When a string of the same type of

rhymes occurs, its pitch spreads to the following syllables until it is blocked by a pitch-assigned syllable. The occurrence of [Ṽ:] is restricted to the first syllable of a grammatical word, most typically in a simple noun consisting of a single root. When it comes to verbs, [Ṽ:] can be observed even in the middle of a grammatical word, particularly in prefixes, certain suffixes, and the second root of a compound, when its first syllable is of /V/ type. The occurrence of [Ṽ:] as phonetic realization of /V/-type rhyme shows that the syllable in question forms a phonologically independent unit.

The mismatch between the phonological and morphological unit might be explained by the fact that some of the prefixes can be traced back to their independent forms. The similarities in form between suffixes and roots or between suffixes and clitics might show that these elements could have moved freely from the inside of a grammatical word to its outside or vice versa at some point in the history of the Haida language.